



第6回企画展

まちづくりと考古学

～盛南開発と遺跡発掘調査～

盛岡市遺跡の学び館

はじめに

私達の住む盛岡市内には約750ヶ所の遺跡があります。

遺跡とは、昔の人々が生活した痕跡の残る場所であり、人類発生以降、綿々とつづく人類の足跡そのものを語るものです。これはつまり、その地域に生きた人々の命の証であり、その地域に残された貴重な財産といえることができるのではないのでしょうか。

わが国の考古学は、人類が残した貴重な財産である遺跡を研究することで、どんな人々の暮らしがあったのかを解明する歴史学と同じ目的を持つ学問です。そこからは、文字が存在する以前の歴史や、文字に残されなかった人々の暮らしや社会構造なども復元することができます。

現在、わが国には広い意味で考古学に携わる人はおよそ7,000人いるといわれています。これは高度成長期以降の国土開発・まちづくりにともなって、姿を消す遺跡を発掘調査し、その記録を保存することを主眼に調査研究をおこなってきたという背景があります。

今回の企画展では、この日本考古学の歩みと、現在盛んに開発の進められている盛岡南新都市土地区画整理事業(盛南開発)地区内の遺跡調査に着目し、今後の遺跡のあり方について考えてみようと思います。

これを機会に、身近にある遺跡についてよりいっそうの関心を持ち、まちづくりと遺跡のありかたについて考えていただければ幸いです。

最後になりましたが、本展を開催するにあたり、多くの関係各機関にご支援を賜りました。また市民の皆様方には、遺跡発掘調査の際に多大なるご協力をいただき、地域の歴史像解明という大きな成果をあげることができました。ここで厚く感謝の意を表するとともに、今後ご支援賜りますよう、お願い申し上げます。

平成19年10月

盛岡市遺跡の学び館

◇実施要項

■盛岡市遺跡の学び館 第6回企画展 「まちづくりと考古学～盛南開発と遺跡発掘調査～」

会期／平成19年10月2日(火)～平成20年1月20日(日)

会場／盛岡市遺跡の学び館 企画展示室

主催／盛岡市遺跡の学び館

後援／岩手考古学会・岩手史学会・岩手日報社・朝日新聞盛岡総局・読売新聞盛岡支局・毎日新聞盛岡支局・日本経済新聞社盛岡支局・時事通信社盛岡支局・共同通信社盛岡支局・河北新報社盛岡総局・産経新聞社盛岡支局・デーリー東北新聞社・盛岡タイムズ社・NHK 盛岡放送局・IBC 岩手放送・テレビ岩手・めんこいテレビ・岩手朝日テレビ・岩手日日新聞社・岩手ケーブルテレビジョン・エフエム岩手・ラヂオもりおか・アキュート・マ・シェリ・情報紙 游悠・株式会社 総合広告社・大人のための北東北エリアマガジン rakra

■フォーラム「まちづくりと考古学」

日時／平成19年10月21日(日曜日)13:30～16:30

会場／当館 研修室

基調講演／講師 市原 富士夫 氏(文化庁 文化財部記念物課)

◇例言

- ・ 本書は、平成19年10月2日(火)～平成20年1月20日(日)に開催する盛岡市遺跡の学び館第6回企画展「まちづくりと考古学～盛南開発と遺跡発掘調査～」の展示図録である。
- ・ 資料については「展示資料一覧」に詳細を掲載した。都合により一部展示替えをする場合がある。
- ・ 資料名については、基本的に所蔵者・所蔵先・報告者が使用する名称に準じているが、用語の統一などのため異なるものがある。
- ・ 掲載順は展示の順序とは必ずしも一致しない。
- ・ 展示資料の写真は、できる限り本図録に掲載するよう努めたが、都合により掲載できなかったものがある。
- ・ 本企画展および本書の企画・編集・執筆は、当館文化財主事今野公顕・学芸調査員相馬容子が文化財主任神原雄一郎・文化財主事佐々木亮二の助力を得て、当館職員と協議しておこなった。
- ・ 本書に掲載した写真のうち、提供者名の記載のないものは、盛岡市遺跡の学び館撮影・所有のものである。
- ・ 本展は、盛岡ゆいとびあミュージアムネットワーク(もりとびあねっと)共同企画「まち～まちをつくる・まちができる」の一環で開催するものである。

◇謝辞

本展を開催するにあたり、下記の皆様方に多大なるご支援を賜りました。記して感謝申し上げます。(敬称略)

岩手県教育委員会・財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・岩手県立博物館・青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室・栃木県立文書館・栃木県立なす風土記の丘資料館・株式会社ヤクルト本社東北支店・小岩井乳業株式会社・本宮地区町内会連絡協議会・独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所・盛岡市都市整備部盛岡南整備課・盛岡市中央公民館・

盛岡ゆいとびあミュージアムネットワーク(もりとびあねっと)

綱川司郎・大金重春・花坂政博・高橋義介・高木 晃・

山本訓志・秋谷沙織・石黒 仁

◇目次

はじめに

実施要項・例言・謝辞・目次

1章 まちづくりと考古学 ～日本考古学の現状～…………… 4

2章 盛南地区の遺跡 ～盛南開発と発掘調査～ …… 10

3章 まちづくりと遺跡 ～遺跡の活用～ ……………… 24

さいごに ……………… 26

参考文献…………… 26

展示資料一覧…………… 27

盛岡ゆいとびあミュージアムネットワーク もりとびあねっとについて

盛岡市中央公園から本宮・太田地区の6つの博物館施設(岩手県立美術館・原敬記念館・盛岡市子ども科学館・盛岡市先人記念館・志波城古代公園・盛岡市遺跡の学び館)が連携をはかり、共同テーマ「まち～まちをつくる・まちができる」を設けて展示会やイベントを開催します。博物館をよりいっそう楽しんでいただるように、各施設の特色を活かした企画を展開します。

I まちづくりと考古学 ～日本考古学の現状～

わが国の考古学の歩み ～日本考古学の現状～

現在、わが国ではおよそ7,000人の考古学・遺跡発掘調査に携わる人の手によって年間約8,000件にも
のぼる発掘調査がなされている。高度経済成長期以降、右肩上がりが増えてきたこの件数も、バブル経済崩
壊を頂点に、減少に転じた。このことは、発掘調査件数が経済活動と密接な関係にあることを示している。



盛南開発地区 遺跡調査風景

日本考古学の黎明

日本人が過去の人間の存在を遺跡から知ったことがわ
かる古い資料に、8世紀頃の『常陸国風土記』がある。「那
賀郡の大櫛という岡は上古の人が食べた貝が岡になってい
る」とあり、これは後の発掘調査で縄文時代前期の貝塚の
ことであることがわかっている。8世紀の人々が、「上古の人
の存在」を認識していたことがわかる。一方では、『続日本後
記』や『日本三代実録』（平安時代の歴史書）にこんな記録
が残っている。839(承和6)年に、出羽国田川郡の西浜(現
在の山形県飽海郡遊佐町付近)で、霖雨があつて、形が
鎌や鋒に似て、色も白・黒・青・赤である多くの隕石が降った。
国司は現物を添えて報告し、政府は異変に備えて神仏に幣
を奉ったという。このような記録は、その後も続き、9世紀の後

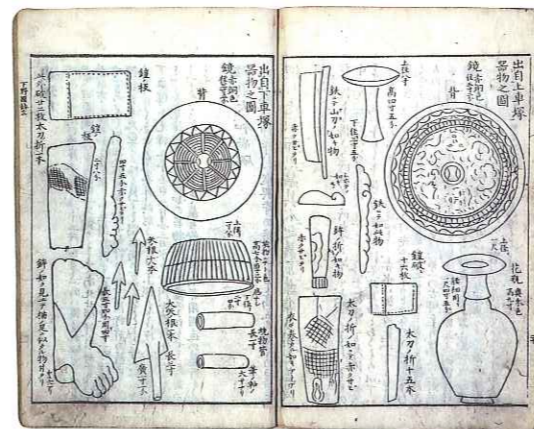
半までみられる。縄文時代の遺跡から長雨の影響で遺物
が洗い流され石鏃が姿を現したのが真相だろうが、過去の
人類の遺産であるとの認識がなかったことがうかがい知れ
る。

日本人ではじめて遺跡の内容を確かめようとして考古学
的な発掘調査をしたのは、あの徳川光圀(1628～1701)と
言われている。栃木県大田原市(旧那須郡湯津上村)の
上侍塚古墳・下侍塚古墳の発掘調査である。この調査は、
徳川光圀が日本三古碑のひとつである「那須国造碑」にか
かれた人物「直草提」が近傍の上侍塚古墳・下侍塚古墳
に葬られているのではないかと仮定し、その墓誌を探すた
めに、佐々宗淳(佐々介三郎)に命じたものであった。発掘

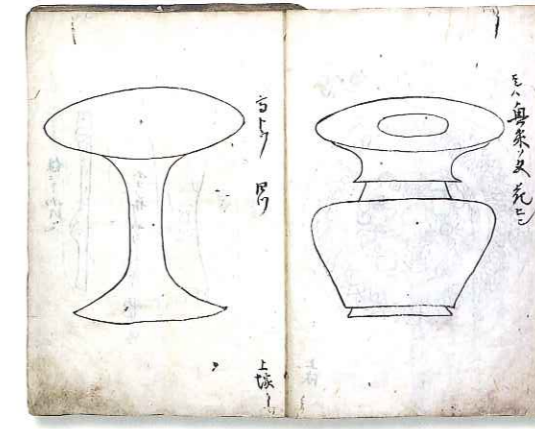
調査では両古墳から埋葬施設を検出し、出土遺物の種類
や数量、および遺物の図を作成するなどの詳細な記録がと
られた。さらに、出土遺物を丁寧に埋め戻したのち、墳丘を
復旧し、盛土崩壊防止のために松を植え調査を完了してい
る。碑と直接関係のある資料の出土は無かったが、宝探し
のような盗掘ではなく、目的意識を持った調査の実施と詳細
な記録資料を作成したこと、調査後は復旧復元し後世にま

で伝え残そうとしたその姿勢は現代の私達にも遺跡の調査
のあり方として大きな示唆を与えてくれるものである。

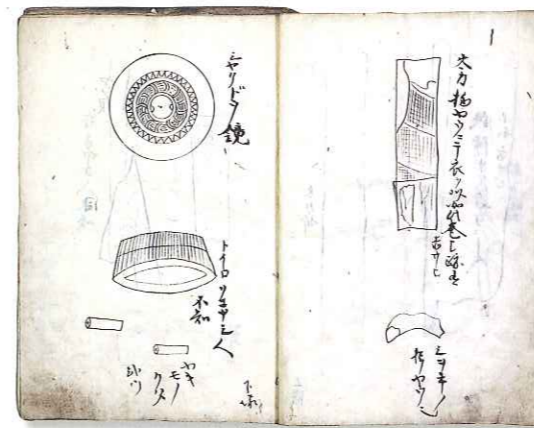
このほかにも江戸時代は天皇陵の研究や石器、青銅器
など様々な分野の研究がなされたことが知られている。たと
えば、今でこそ教科書にも登場する「前方後円墳」という言
葉が生まれたのも、江戸時代の蒲生君平によって創案され
たものである。



下野国誌(綱川司郎氏蔵)



湯津神村車塚御修理(大金重晴氏蔵)



湯津神村車塚御修理(大金重晴氏蔵)



湯津神村車塚御修理(大金重晴氏蔵)

当時は車塚と呼ばれていた上・下侍塚古墳出土品の記録【栃木県立文書館 写真提供】



西側から見た上侍塚古墳



東側から見た下侍塚古墳

現在も美しく松が茂る上侍塚・下侍塚古墳【栃木県立なす風土記の丘資料館 写真提供】

II 盛南地区の遺跡 ～盛南開発と発掘調査～

JR盛岡駅西口からまっすぐに伸びる杜の大橋をわたると、盛岡市中央公園の緑が、そしてその先には新しい街並みがひろがる。盛南開発(盛岡南新都市土地区画整理事業)という大規模な再開発事業によって整備されたこの地域は、かつては広大な農地に住宅が点在する地域であった。今では国道46号線バイパスをはじめ、計画的に市街地や宅地が形成され、およそ7,000人・2,800世帯(平成19年3月)を抱える新市街地として注目されている地域である。



南上空から見た盛南地区(平成3～5年頃、事業着手前)

盛南開発

盛岡市の市街地の南西部、雫石川の南に広がる約445ヘクタールの地域に職住近接の新市街地を形成しようというのが盛南開発構想で、全体計画の7割に当たる313.5ヘクタールを整備するのが盛岡南新都市開発整備事業である。事業主体は独立行政法人都市再生機構(旧地域振興整備公団)で、平成7年11月に着工し、いまなお事業は進行中である。

これに先立ち、平成5年度から、この地域に確認されている約88ha・16件の遺跡の発掘調査が、盛岡市教育委員会と(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって進められており、この地域の歴史を考えるうえで、貴重な多くの成果を挙げている。

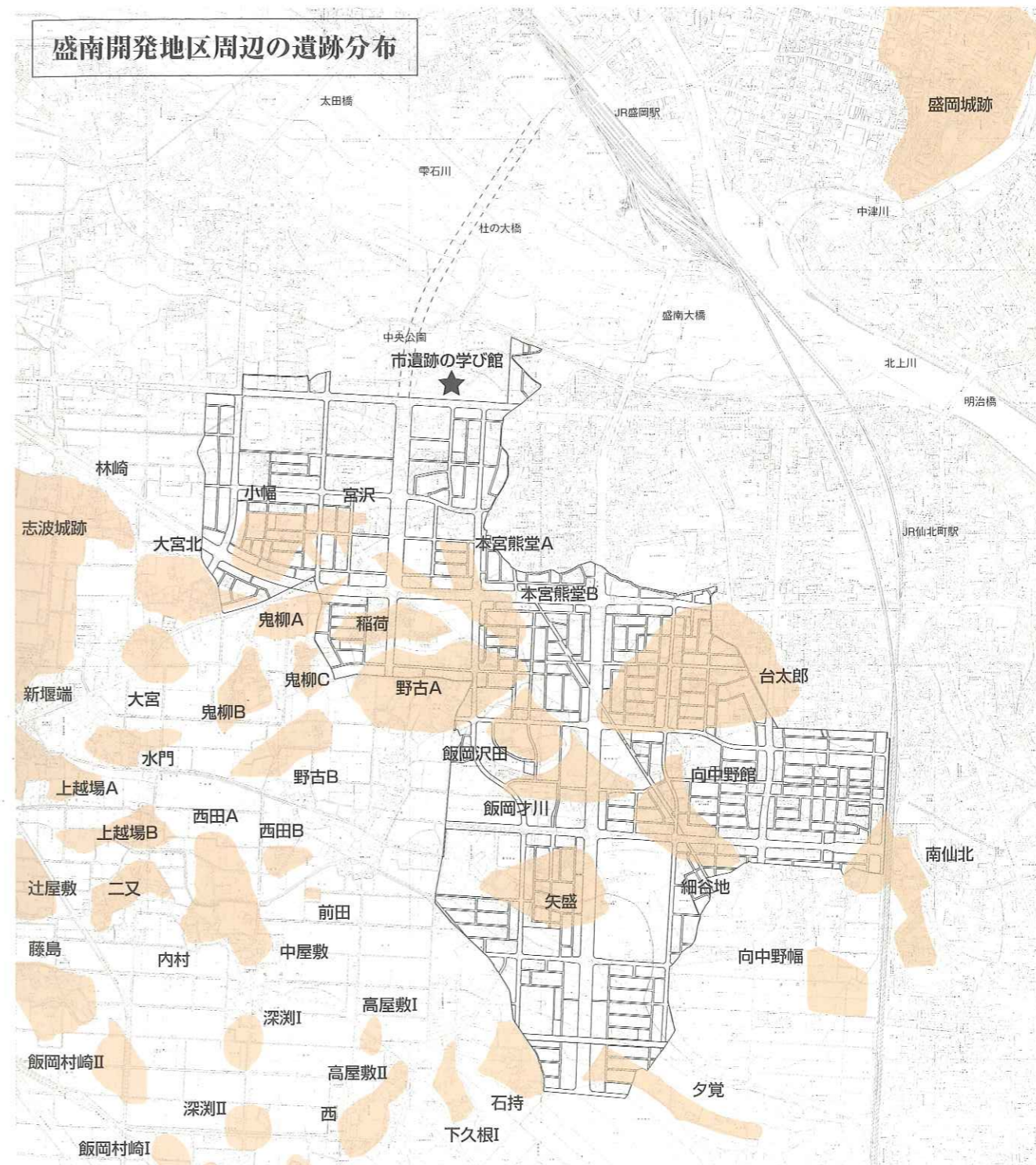


盛岡市中央公園上空から見た盛南地区 左下が当館(平成18年11月撮影)
[独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所 写真提供]

地形と遺跡分布

盛岡市は、岩手県から宮城県を南流する北上川に中津川・雫石川・築川といった支流が合流する北上盆地の北端に位置し、盛南地区は北上川の西岸と北上川の支流である雫石川の南岸に広がる沖積段丘上に立地する。この雫石川は奥羽山脈から東流し、鳥泊山と箱ヶ森に挟まれた北の浦付近(市内上太田)で急激に流路を狭められ、その狭

窄部を抜け北上盆地に入り、北上川と合流する。雫石川の北岸には岩手山を供給源とする火山砕石流堆積物と火山灰層がのる台地が発達していることにより、その狭窄部以東の南岸は流路転換が顕著に見られ、沖積段丘が発達している。雫石川の旧河道は幾筋も確認されており、連続する大きなものは4条、そのほかにも網目状に細かな旧河道も確認されており、複雑な河道変遷を示す。それらに画された微高地に、古代を中心とした遺跡が分布している。





志波城跡 全景

古代

古墳時代末、7世紀中葉の遺構遺物は、**台太郎遺跡**や**野古A遺跡**などで確認されているが数は多くはない。奈良時代、8世紀中葉以降、**竪穴住居跡**を主体とした集落跡が増加する。**台太郎遺跡**・**野古A遺跡**・**本宮熊堂B遺跡**・**細谷地遺跡**・**飯岡沢田遺跡**などにおいてみつかったこの時期の集落は、大型の竪穴住居跡1棟を中心としその周囲に中～小型の竪穴住居跡が数棟ずつまとまりをもって分布する傾向がある。また、本地域の西方には、太田蝦夷森古墳群や高館古墳群などの有力者の墓と考えられる古墳群が造営された。

9世紀、平安時代初頭803(延暦22)年には、本地域の西に**志波城**(下太田方八町他)が造営される。志波城は東北地方経営のために朝廷が坂上田村麻呂を城司として造営した城柵であり、東北地方に20数ヶ所造られた城柵のうちでも陸奥国府多賀城に匹敵する最も規模の大きなものであった。陸奥国の最北端に位置した志波城は、北側を流れる雫石川の度重なる洪水の被害を受け、およそ10年で文室綿麻呂の建議により**徳丹城**(矢巾町西徳田)を造営し機能を移転した。その後、徳丹城は9世紀の半ばまでにはその機能を停止し、本地域も含む陸奥国の北部地域は、**胆沢城**(奥州市水沢区九蔵田)による一城支配の体制となる。

これら城柵の造営は、地域社会に大きな影響をあたえたものと考えられる。9世紀半ば以降の集落においては、竪穴住居跡の規模の大小差は縮小し、重複が著しく見られるようになる傾向があり、社会体制の変化があったものと考えられる。以降、竪穴住居跡を主体とした集落数は増加の一途をたどる。その中でも、**向中野館遺跡**の低湿地からの祭祀に関係すると考えられる遺物の出土や**飯岡沢田遺跡**・**飯岡才川遺跡**の円形周溝墓群や火葬骨蔵器の出土など、本地域内の使われ方の分化もみられる。先進的な仏教的葬送の一方で、前代からの古墳造営があることが注目される。

また、9世紀後葉から10世紀中葉にかけては、地域の拠点的な集落も姿を現す。ちょうど徳丹城による直接支配の体制から、胆沢城の広域支配の体制に変化してきた頃といえる。**細谷地遺跡**では、微高地の南斜面に沿うように2×2間の総柱の掘立柱建物跡が東西に並立し、倉庫群の存在をうかがわせる。倉庫群は穀物などの備蓄が想定され、税などを集積したものかもしれない。また**大宮北遺跡**や、本地域の北西、志波城跡の北西に隣接する**林崎遺跡**などで、竪穴住居跡が主体の当地域内では異質にみえる官衙的な規模の大きな掘立柱建物跡を計画的に配置した集落もみつかっており、在地有力者の支配拠点的な集落の可能性もあろう。

台太郎遺跡 (向中野字台太郎・八日市場・向中野)

盛南地区最大の面積を誇る縄文時代晩期・古墳・奈良・平安・中世・近世と断続的に続く集落遺跡。7世紀～10世紀の集落、13～16世紀の豪族居館・土坑墓群・道路跡、江戸時代の農家住宅など広大な面積に多数の遺構が見つかっている。

特筆すべき古代の遺物として、関東地方系の土師器坏や、湖西窯(静岡県)産と考えられる須恵器平瓶、関西地方の影響を受けた可能性のある暗文をもつ土師器坏など、各地との交流を示す遺物が出土している。



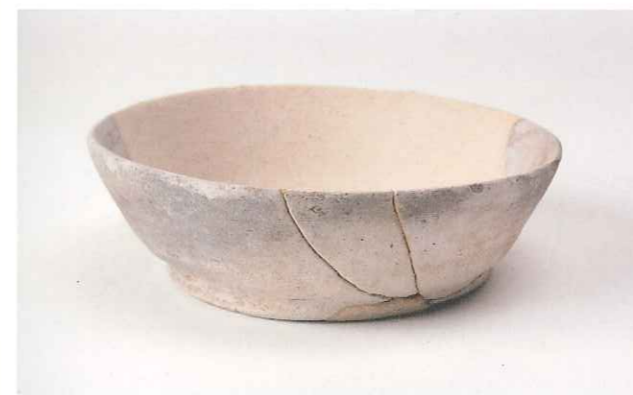
台太郎遺跡第55次調査 RA613竪穴住居跡



台太郎遺跡 RA580竪穴住居跡出土 土師器坏(左:関東系土師器)



台太郎遺跡 RA507竪穴住居跡出土 須恵器平瓶(湖西産)



台太郎遺跡 RA613竪穴住居跡出土 須恵器坏



台太郎遺跡 RA613竪穴住居跡出土 土師器 赤彩球胴甕



台太郎遺跡 RA613竪穴住居跡出土 土製品・石製品 (左上から土製基石・碧玉製管玉・土製紡錘車・砥石)



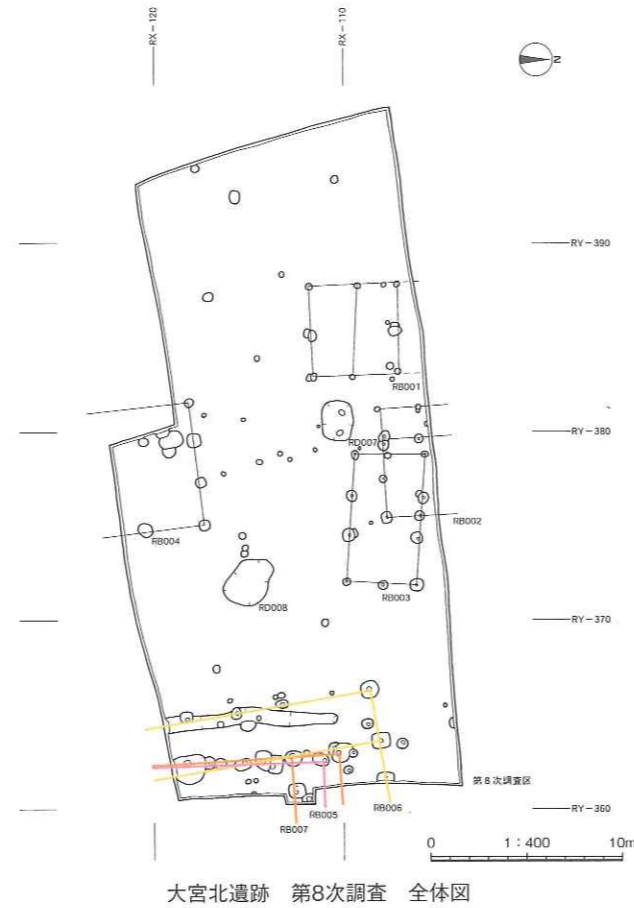
台太郎遺跡 RA615・617竪穴住居跡ほか出土 土錘

ほそやち
■細谷地遺跡(向中野字細谷地)

9世紀を中心とする集落遺跡。向中野館遺跡の水場祭祀の主かとかんがえられている。また、畑の畝間と考えられる小溝跡群もみつかっており、当時の村の様子的一端がうかがえる。

おおみやきた
■大宮北遺跡(本宮字大宮・小幡)

10世紀後葉の拠点的な集落。官衙的な掘立柱建物跡が建替えられて存続したり、そのそばに掘られた土坑からは割られた状況でまとまって坏類が出土したりしているほか、比較的大規模な区画溝が検出されている。地域支配の拠点であった城柵志波城および徳丹城(矢巾町徳田)廃絶後の胆沢城一城支配体制の下に発達した地域支配の拠点的な居館の位置した可能性がある。西に隣接する林崎遺跡(10世紀中葉)の後、南に隣接する大宮遺跡(12世紀後半～13世紀初頭)の前に栄えたと考えられる。



大宮北遺跡 RD008土坑出土 あかやき土器高台付坏



大宮北遺跡 RD008土坑出土 あかやき土器高台付坏の底面



大宮北遺跡 RD008土坑出土 あかやき土器坏

中世

11～12世紀にかけての、本地域の様相ははっきりしないが、12世紀末～13世紀初頭頃のものと思われるかわけが、大宮遺跡の大溝跡から多量に出土している。13世紀後半には、台太郎遺跡では不整五角形のプランを持つ居館が営まれ、地域を支配した領主の存在が想定される。さらに同遺跡では、土坑墓群や宗教施設と考えられる遺構も検出されており、出土遺物から15世紀頃までの存続が考えられる。また向中野館遺跡や矢盛遺跡でも、大規模な堀跡などが検出されており、出土遺物やそのプランから16世紀代を中心とする居館跡と考えられている。中世・戦国時代には、地域を支配する領主達が割拠していた様子うかがえる。



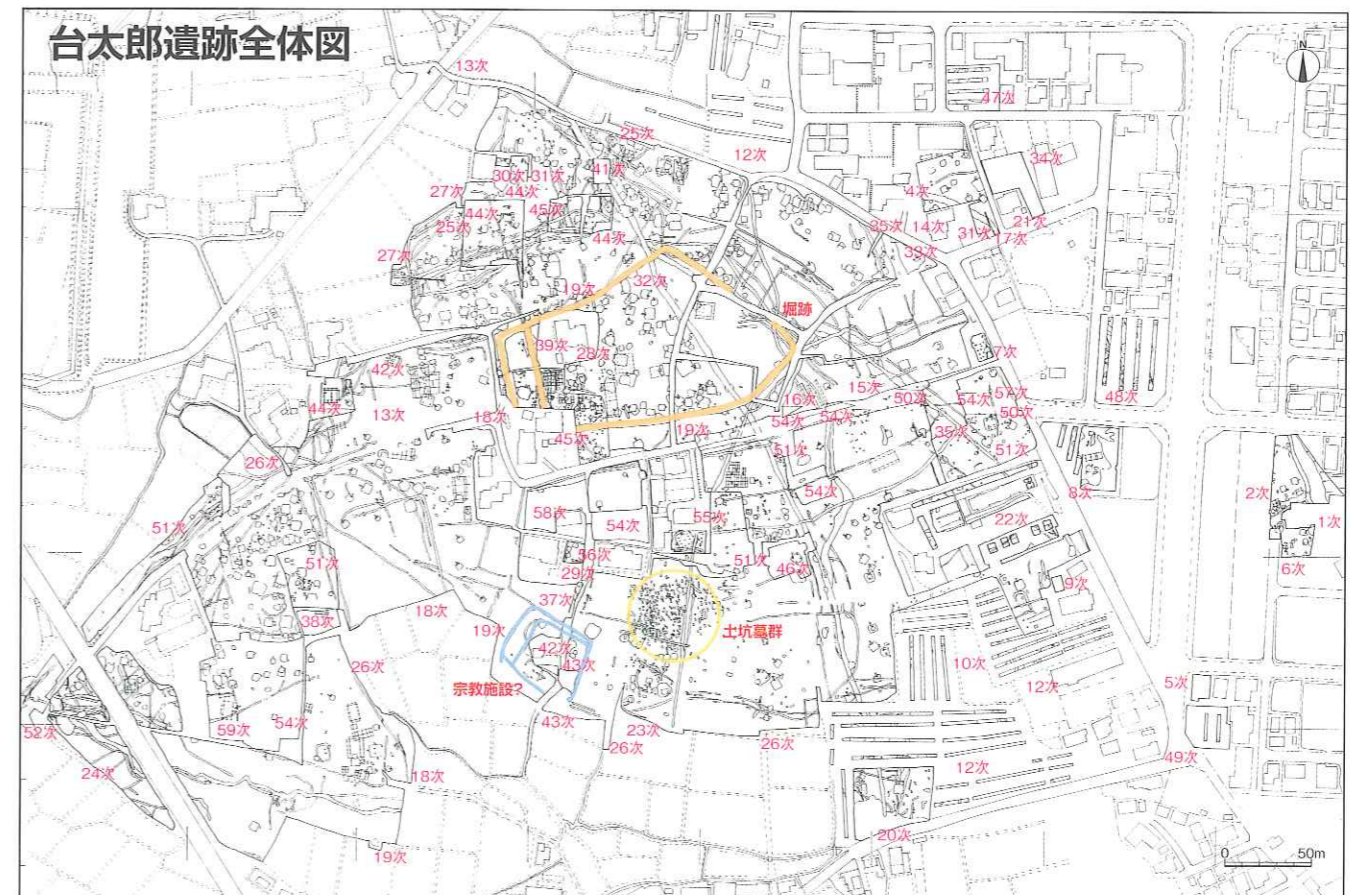
台太郎遺跡出土 青磁碗



台太郎遺跡 第39次調査全景(上が南)
居館の堀跡が検出されている。



台太郎遺跡 堀跡 断面



近世

江戸時代に入ると、雫石川は現在の流路となり、旧河道の東側には奥州道中や仙北組町が開かれ、本地域は水田地帯に農家が点在する農村地帯となる。小幅遺跡や台太郎遺跡からは曲屋などの掘立柱建物跡や土坑墓、南仙北遺跡では道路遺構などの近世以降の遺構が見つかり、この姿は盛南開発施行直前の本地域の様子とあまりかわらないと考えられる。

こはば 小幅遺跡 (本宮字小西)

奈良・平安時代の集落跡のほか近世の農家建物とその区画溝もみつまっている。近世村落の様子がよくわかる。

みなみせんぼく 南仙北遺跡 (向中野字鶴子・南仙北2丁目)

遺跡の中心は、盛南開発区域外(JR 東北本線の東側)だが、平安時代の集落や区画溝、江戸時代の道路跡などがみつまっている。道路跡は江戸時代の「向中野通絵図」(盛岡市中央公民館蔵)と見比べると、興味深い。



南仙北遺跡 両外側の平行して走る溝が道路側溝か



台太郎遺跡 第57次調査区全景 中央部に2棟の近世建物跡が見える。柱穴の底面から、寛永通宝など古銭が出土

だいたろう 台太郎遺跡

古代～中世の遺跡として有名だが、近世の掘立柱建物跡や古銭などの遺構遺物も数多くみつまっている。向中野通絵図からもわかるとおり、当時は一帯が農村だったことがうかがえる。



南仙北遺跡 RG158溝跡出土 播鉢(瀬戸・美濃、備前 17～18世紀)



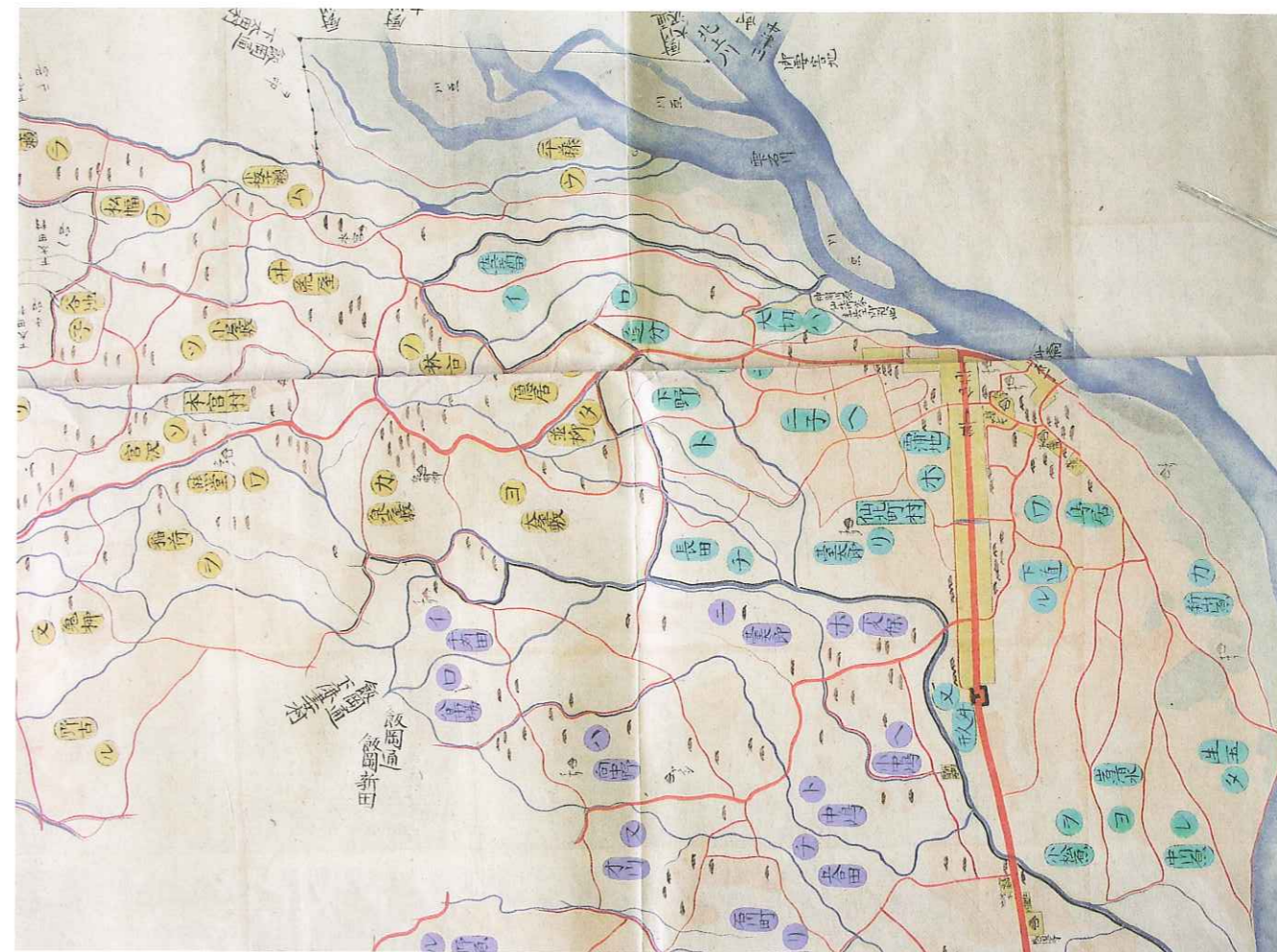
南仙北遺跡 調査区全景 左側に並行して溝が走る



台太郎遺跡 RB054掘立柱建物跡他出土 古銭



向中野館遺跡出土 青磁



向中野通絵図(盛岡市中央公民館蔵) 地名や道路など、興味深い。

コラム 発掘された昭和の記憶～小さなガラス瓶～

発掘調査で発見されるのは大昔の土器や石器だけではない。遺跡の近所の家庭で廃棄した現代のゴミが大量に埋められていることがあるのだ。一見すると燃えないゴミとしか見えないのだが、よく目を凝らして見ると、飲料水から整髪剤や目薬の小瓶など懐かしいモノが数多くあることにおどろくことがある。

写真の小瓶は飯岡才川遺跡や台太郎遺跡で採集した高さ6cm程度程度の瓶であるが、表面には「クロレラ 生菌 ヤクルト」とある。そう、お馴染みのヤクルトなのである。現在はプラスチック容器で販売されているが、昭和30年代は瓶で販売されていた。現在の30歳代未満の人には馴染みの無い容器であるが、多くの人からみると懐かしい容器に違いない。このほかにも、今は売っていない「小岩井デラックス牛乳」と書かれた角張った牛乳瓶や宅配用のヨーグルト瓶なども出土している。

さて、これらの瓶類は何故収集されたのだろうか。それは、昭和30年代という最近の瓶でありながら既に風化した存在になっていたからである。「ヤクルトが昔は瓶だった」という事実を消さないように保管したのだが、あと20年も経てば「昔はプラスチックだったらしいよ」なんて言われる日がくるのかも知れない。



盛南地区の遺跡から採集されたガラス瓶たち (小岩井ヨーグルト・ヤクルト・目薬ほか)



飯岡才川遺跡 採集 ヤクルト瓶(S=1/2) (昭和30年代 後葉)

III まちづくりと遺跡 ～遺跡の活用～

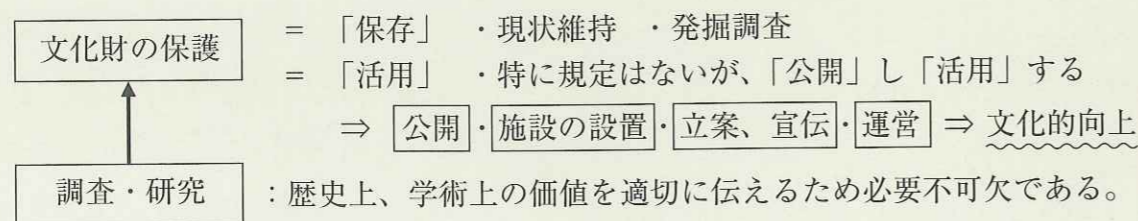
文化財保護法では、遺跡が破壊される開発の前には、その場所に何が合ったのか確認する調査を実施し、保存できない場合は発掘調査を実施し記録保存することとなっている。この場合の記録保存とは、詳細な発掘調査報告書として後世に残すことを主に指している。

しかし、この報告書は専門的な知識がなければその内容を理解することが難解なものであることは否めない。文化財保護法では、「文化財は国民共有の財産である」旨をうたっている。記録保存された遺構や収蔵庫に保管された多くの出土遺物は、報告書刊行後は日の目を見ないものの方が多いのが事実だろう。この発掘調査されて得られた成果、つまり調査資料や出土遺物は、国民共有の財産として活用されているかと言えば、必ずしもそうとはいえないのではないだろうか。

ここでは、そうした調査成果である資料をいかに地域住民のために還元し、活用をはかっていけるのか、様々な考え方の一例を提示し、皆さんと考えていきかけたい。

◇文化財保護法の理念

文化財保護法の目的とは「文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献すること」である。



◇「遺跡学」という考え方

日本の考古学は、その出土資料である遺物の詳細な研究においては世界に誇る研究の成果があるといわれている。土器の編年研究がその際たるものであり、先学たちの研究が現在の日本考古学の礎となっていることは間違いない。しかし、これまで日本考古学は遺物の研究に偏重する傾向があったという反省に基づき、人類の営みの複合的な産物としての遺跡を総合的に研究し、いかに現代社会の中に位置づけていくことを考えようという「遺跡学」という考え方が提唱されてきている。考古学ばかりでなく、歴史学、環境学、都市工学、公園整備、観光、教育、社会学など、さまざまな側面から「遺跡」をみることで、あらたな価値観をうみだそうとしている。

◇「観光考古学」という考え方

保存され整備された遺跡は、その地域のシンボルとして地域住民によって積極的に活用されることが望ましいが、そこにはその地域の大きな個性を体現する観光資源としての価値も大きい。この遺跡の活用の新たな側面としての観光のあり方について考えようと提唱されたのが観光考古学である(この呼び方について、考古観光学といったほうが良いのではないだろうか)。観光を考古学的に見るのではなく、考古学の成果をいかに観光資源として活用を図り、まちづくりの中に位置づけていくのかを検討するものである。遺跡や文化財は、それだけでも地域の個性として観光資源としての価値は高いが、積極的に活用を図ることで、よりいっそう地域住民にとっての誇りと思える観光資源として認知されていくことだろう。

◇遺跡は地域の個性の体現者という考え方

遺跡とは、長きにわたった人々の生活の痕跡。時代ごとに人々の生活スタイルが異なることや土地ごとの気候風土の違いによって、その場所に生きた人々の生活の痕跡のある場所である遺跡は、実に十人十色、特色が豊かである。つまり、遺跡は同じものは他所には無い、その地域のオリジナリティをあらわす環境の一部といえ、地域特有の歴史を体現するものといえる。たとえば、観光である街を訪れた場合、その街にしかないものを見に行こうと考えることが普通だ。その際に真っ先に候補に挙がるのが、その土地の歴史を物語るもの=広い意味での遺跡ということではないだろうか。このことから、地域住民のアイデンティティやコミュニティ創出のひとつの材料として、そのまちの個性的な価値観のひとつとして、遺跡を活用していくことができるのではないだろうか。

◇世界遺産の理念

世界遺産とは、1972年のユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(世界遺産条約)に基づいて、世界遺産リストに登録された遺跡や景観そして自然など、人類が共有すべき普遍的な価値をもつものを指す。

その理念は以下のように言われている。

「世界遺産とは、地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から引き継がれた貴重なたからものです。世界遺産にはさまざまな国や地域に住む人びとが誇る文化財や自然環境などがあります。なかには人類の残酷な歴史を刻むもの、また戦争や自然災害、環境汚染などにより危機にさらされているものも含まれています。それらは国際協力を通じた保護のもと、国境を越え今日に生きる世界のすべての人びとが共有し、次の世代に受け継いでいくべきものです。(ユネスコ ホームページより)」



南仙北遺跡第38次調査現地説明会(平成18年)
 地域の方々を中心に約80名の来場をかぞえた

◇考古学の目指すところ

遺跡や遺構・遺物をもとに、人類の生活・文化を研究する学問といわれる考古学だが、もう一步踏み込んで考えれば、遺跡を元にその社会を復元することともいえる。この社会の復元をすると、歴史上で似たような事柄は繰り返し、様々な地域で発生することがわかるわけだが、それは全て別の営みであることも事実である。小さな発見を積み重ね、その地域の社会を復元することが、考古学の目的なのではないだろうか。そしてその成果を、学校教育や地域学習に積極的に活用できるようにしていくことが、求められているのではないだろうか。



志波城まつり 地域の子どもの郷土芸能さんさおどりも披露される



志波城まつり 保存整備された史跡で行われるまつり
 毎年多くの人でにぎわっている